

# 「オネエ所長の調査ファイル # 6」

山崎浩治

1

「時々考えるの。これは女装じゃない。こっちが本来の姿で、普段のあたしは男装の麗人じゃないか、って。ほら、`ベルサイユのバラ、のオスカルみたいに」

「何が男装の麗人ですか。女装した白鷗みたいな顔して」

「あたし、本当の自分が分からないの。人生の迷子ちゃんになっちゃったのかなあ」

「症状が進むと自宅さえ分からなくなると言いますからね。外出時には連絡先を書いたカードを首からぶら下げておくといいですよ」

「トオルちゃんのバカ！ 人を認知症患者のように言わないで！」

「金沢プライベート・リサーチ」のオネエ所長・市山とイケメン調査員の透が夜の片町で立ち話している。ソバージュのカツラをつけた市山はデコルテ、背中、うなじを見せたサテンのロングドレスで一見、客待ちのホステス風。千鳥足の酔客が市山に声をかけようとしてのがぞり、道端に嘔吐した。

今回の依頼人は金沢市に住む専業主婦の久美子(57歳)である。中堅会社の営業部長を務める夫・隆(59歳)に不審を抱いた久美子がある日、クレジットカードの使用履歴をネットでチェックすると、多額の飲食費やホテル代が使われていた。宿泊した日付は夫が出張した日ばかり。使用頻度は1年ほど前から急激に増え、月々の利用料は多い時で30万円以上に達していた。他にも自分の知らないカードを持っているかもしれないと思うと、ゾッとする。夫のガラケーを調べたところ、ユイという女と頻繁にメールのやりとりをしていた。そういえば今年の正月、片町のとあるクラブから届いた年賀状に、そんな名前があったことを思い出す。

「夫がホステスと浮気している。証拠をつかんで、とっちめてやりたい！」

かくして久美子から依頼を受けた市山と透が張り込んでいるのだ。この日、「出張に行く」と家に連絡してきた隆は退社後、結衣(23歳)と合流して焼肉店に赴き、クラブに同伴出勤していた。ご機嫌な様子で隆が結衣と連れ立って店から出てきたのは午前1時を回ったころだ。スリットから太ももを大胆に露出させたドレスをまとった結衣は人気女優ソックリの美人だった。

2

「店のトップスリーに入る人気ホステスをホテルにお持ち帰りなんて、依頼人のダンナも隅に置けませんね」

前夜、タクシーに乗った隆と結衣はホテルに直行。その決定的瞬間の撮影に成功した透が「金沢プライベート・リサーチ」のオフィスで言った。市山は小指を立てた手でプリントアウトした証拠写真をためつすがめつ眺めている。

「依頼人はダンナと離婚するつもりでしょうか、所長」

「それはないと思うわ」

相談にやってきた久美子は、市山にこう語っていた。

「私の実家は商売をやっていました。父はちよくちよく女遊びをしていたようですが、母は『小遣いの範囲なら、と大目に見ていたようです。私もいまさら夫と別れるつもりはありません。お灸を据えてやれば熱も下がるでしょう」

久美子の言葉に、透が感心した。

「それはよくできた奥さんですね！」

「でもね、ちょっと心配なのよ。七つ下がりの雨はやまない、って言うでしょ」

「何ですか、それは」

「中年過ぎて始まった道楽はやめるのが難しいということ。しかも、依頼人の夫は会社でも評判の堅物。こういう人が恋にハマると一直線に突進してしまいがちなのよ。トオルちゃん、念のため相手の女の周辺を調べておいて。少し気になることがあるの」

数日後、市山の嫌な予感は的中した。久美子に証拠写真を突きつけられた隆は渡りに船とばかり、開き直った。

「彼女を心から愛しているんだ。私と別れてくれないか。慰謝料はおまえの望み通り支払うから」

激昂した久美子が早口でまくし立てた。

「きれいな蝶が飛んでくるのは美しい花だけよ！ 畑の腐った野菜にはハエしか飛んでこないんだから！ あなたは腐った野菜、あの女がハエだと分からないの！」

### 3

営業部長の肩書きを持つとはいえ、会社の上層部はすべて社長の親類という同族会社だ。経営に対する権限は一切なく、おまけに数年前、可愛がってくれた先代社長が会長に退き、息子が新社長になってからというもの、隆の存在感は日ごとに軽くなっていた。

とはいえ、定年間近まで、つつがなく勤め上げてきたことには満足している。県外の私立大学に進んだ2人の息子にはアパートの家賃と生活費込みで、それぞれ毎月10万円を仕送りした。お蔭で40代以降はつましい生活を強いられたけれど、案外、苦には感じなかった。金のかかる趣味はないし、付き合い以外で酒も飲まない。社内や取引先から「堅物」と陰口を叩かれるのは密かな誇りでもあったのだ。

数年前に大学を卒業した息子は2人とも都会の企業に就職し、大過なくやっている。住宅ローンも無事完済し、会社の囑託として65歳まで定年延長ができそうだと妻と喜んでいた矢先に出会ったのが結衣だった。

部下の接待に同行して出かけたクラブに結衣はいた。盛り上がる取引先や部下を尻目に、隆がちびちび水割りをすすっていると、隣に座ったヘルプの結衣が声をかけてきた。

「お客さんみたいな人の隣にいと、何だかホッとすな」

それから、ぽつりぽつりと会話が始まった。しばらく話すうち、驚くほどの美人でありながら、結衣がヘルプに甘んじているのは男慣れしていない接客と、ぼそぼそと話す暗い口調のせいだ

と分かった。それでも「ナンバーワンは無理かもしれないけど、せめてトップスリーになりたいなあ」などと、けなげなことを言う。その夜以来、店に通い出したのは、そんな結衣を精一杯応援してやろうと思ったからだ。

そこに下心はなかった、と思う。何しろ同伴出勤すれば、最低でも一晚2万はかかる。週1ペースなら、同伴だけで月に10万円。セックスが目的ならば、風俗に行く方がよほど安い。実際、懐はかなり厳しかったが、足繁く通ううち、結衣の成績がぐんぐん伸びていく。そうなる自信が芽生えてきたのだろう、陰気な表情が人が変わったように明るくなった。指名が増えたせいで、隆はボックス席で待つ時間が増えたものの、ヘルプでくすぶっていた結衣を人気ホステスに育てたのは自分だと思うと、悪い気はしない。初めて結衣を抱いたのは、出会って数カ月過ぎたころである。かつて味わったことのない快感のなかで、結衣がささやいたのをいまでも鮮明に覚えている。

「ユイ、ナンバーワンになったらホステス辞めて、タカちゃんの奥さんになろうかな」

同伴出勤のペースが週2回以上になったのは、それからほどなくのことだった。

#### 4

修羅場の末に自宅を出て賃貸マンションに移り住んだ隆を、市山は依頼人を介して「金沢プライベート・リサーチ」のオフィスに招き、説得を試みた。

「あなたも大人の男なんだから、不倫のルールくらい知ってるでしょ？ 本気にならない。妻をないがしろにしない。バレたら謝る。いまからでも遅くない。奥さんに謝れば、丸く収まるわ。ううん、丸くはないかもしれないけど、四角か三角になっても収めなきゃ」

しかし隆は頑なだった。

「女房には悪いと思っています。でも私は彼女を愛してしまった。定年前のいまが人生をやり直す最後のチャンスなんですよ。彼女も私と結婚したいと言ってくれています」

「あのね、彼女は夜の世界に生きるホステスよ。お客と疑似恋愛するのが仕事なの」

「私とは疑似恋愛ではありません」

「彼女にとって、あなたは太い客。でも、やがて定年を迎えたら、あなたの経済力は激減する。そうなれば、彼女はあなたを歯牙にもかけないわ」

「彼女はそんな女じゃない！」

「あなたは本当の彼女を知らないのよ」

市山が隆の前にアルバムを開いて置いた。

「彼女の高校の卒業アルバムよ。同級生を探し出して借りてきたの。これが本当の彼女。よくご覧なさい」

市山が指さす個人写真には結衣と似ても似つかない、野暮ったい女子高生が写っていた。

「彼女、ホステスになるまで付き合った男性はいなかったらしいわ。あたしは必ずしも外見のせいだとは思わないけど、彼女はモテない理由を外見のせいだと考えた。だから、整形したのね。しょっぱい女が陥りがちな短絡思考。ホステスになったのは男たちから一度チャホヤされてみ

たかったからでしょう」

絶句して卒業アルバムを凝視する隆に、市山が優しく語りかけた。

「あなたが見ていた彼女は虚像だったのよ」

5

依頼人夫婦はその後、協議離婚した。度を越したクラブ通いで業務に支障を来すようになった隆の囑託採用の話は立ち消えとなり、60歳の誕生日に定年退職。退職金1200万の半分と自宅を慰謝料として久美子に渡すのが離婚の条件だった。

「彼女が整形美人だってよく分かりましたね、所長」

「金沢プライベート・リサーチ」のオフィスで市山と透が調査を振り返っている。

「オネエは整形に対するセンサーがシビアなの。どちらも作り物だから」

「だけど、相手が整形だと知りながら、ダンナが離婚を選ぶとは思いませんでした」

「自分が愛したのは整形前の純真な彼女なんだって。別に美人だからホレたわけじゃないって、ぬけぬけ言ってたわ。オヤジってどうしようもないロマンティストなんだから」

「自分だってオヤジのくせに！」

隆は手元に残った退職金でクレジットカードやカードローンの借金を返済し、クラブ通いを続けたものの、やがて資金が底をついたのか、夜の街から姿を消した。結衣が30代の会社経営者と結婚し、クラブを寿退社したのも同じころだった。

「別れた夫の現状を知りたい」

久美子から再び依頼があったのは1年後のことである。離婚した久美子は午前中に弁当屋、夜に清掃のパートを掛け持ちして生計を立てているという。

髪をアップにまとめ、シックなワンピース姿の市山と透が様子を見に行くと、隆は金沢市内のワンルームマンションで暮らしていた。定職はないらしく、週に何度か、工事現場で交通整理の仕事をしているようだ。毎晩のように飲み歩いていたころの精気はなく、頭には白髪が増えて一気に何歳も老け込んでいた。

「なんだか衰れを誘いますね。この状態を知ったら、依頼人は元ダンナとヨリを戻すんじゃないですか。離婚しても心配しているくらいなんだから」

コンビニで一番安い弁当を買って帰宅する隆に同情した透に、市山が言った。

「あらあら、トオルちゃんもロマンティストねえ。女はそんなに甘くないわよ」

久美子は元夫のいまを知りたい理由を、このように語った。

「何十年も積み重ねてきた生活を積み木みたいに壊したあの人には、不幸のどん底に落ちていてほしいんですよ。私はそれを知って心の底から笑いたい。ざまあみろ、と」

市山が話すと、透が顔を引きつらせ、「女ってチョ～こええ！ 怖すぎます！」と体を震わせる。隆がスーパーで食品を万引きした容疑によって逮捕されたのは、さらに半年後のことだった。